

「仙台・羅須地人協会」セミナー大内秀明経済学の解説

第 17 回 大内秀明『「資本論」の常識』（第 3 部 マルクスの遺産と現代）を読む

田中 史郎

第 3 部 マルクスの遺産と現代

第 1 章 「現存社会主義」の危機とマルクス＝レーニン主義

オーウェル『1984 年』の意味するもの

本章は、G.オーウェル『1984 年』¹の紹介から始まる。

「スターリン独裁体制を批判してやまないオーウェルは、単なる反共右翼の文芸家に身をおとしたわけではなかった。第二次世界大戦中は、労働党支持の新聞『トリビューン』紙の文芸部長を務めた。『トリビューン』紙は、労働党左派の機関紙であり、柔軟で自由で人間的な社会主義の立場を守り現在でも健在である。」(370-1)

「オーウェルは終生、社会主義の思想を捨てようとしなかったことは明らかである。」(371)

「ポーランドを日本のようにしたい」

こうした社会主義の「暗くて重苦しい事実」という状況の中で、ポーランドのワレサ議長の来日の経緯が紹介される。

「1981 年 5 月、我が国の総評の招きで、ポーランド自主労組「連帯」のワレサ議長の一行が日本にやってきた。」(372)

彼は「ポーランドを日本のようにしたい」(372)と語ったという。

「連帯」は宗教の自由を強調した

そこでワレサ議長との議論だが、以下のようにまとめられる。

「いまなお生き続けている「連帯」に、総括的な評価は控えよう。しかし、個人的感想を交えて 列挙すれば、

(1) 共産党と国家権力と労働組合が、...一体化し...労働組合は、官僚支配の道具であり手段にすぎない。...「連帯」の要求により政労合意で実現した「独立かつ自治の労働組合」は、プロレタリア独裁の支配機構を崩す意味をもっていた。

(2) プロレタリア独裁のもと、ソ連型社会主義の基礎は、...それゆえ国有・国営の中央集権型指令経済である。「連帯」の要求は、あえて社会的所有の外枠には手を触れることなく一同時にまた共産党であるポーランド統一労働党の指導、現存のソ連圏との国際的同盟関係に手を触れずに一自主かつ独立の労働組合にもとづいて、内側から体制の組織と機能を変質させ活性化を図る、いわば管理社会の内部革命であり、平和革命であった。このような平和的かつ内部革命の方法を選択したのは、いうまでもなくソ連の軍事介入を招いて失敗したハンガリー²やチェコ³の教訓を学ぼうとしたこと、...であろう。

(3) 「現存社会主義においては、官許のイデオロギーであるマルクス＝レーニン主義によって体制の統合が図られ、...。「連帯」は、独立・自治の労働組合の結社の自由だけでなく、形の上では憲法で

¹ 原題は、*Nineteen Eighty-Four* (1949 年刊)。全体主義国家によって統治された近未来世界を描く、ディストピア小説。

² 「ハンガリー事件(革命)」(1956 年)とは、ソ連支配と共産党独裁に対する国民の蜂起。

³ 「チェコ事件(プラハの春、1968 年)」とは、上記と同様な蜂起を指す。

保障されている「表現および出版の自由の尊重」「あらゆる宗教にマスメディアの機会を与える」要求を政労合意に盛り込んだ。」(375-6)

⇒ここまでは、現存(当時の)社会主義国の状況をふまえた、「ポーランド連帯」の活動が紹介されている。言うまでもなく高く評価されている。

五つの共産主義とマルクス＝レーニン主義⁴

「ポーランド「連帯」の提起した問題は、現存社会主義の根底を揺るがし、社会主義活性化への大きな実験だった。この実験は、ハンガリー、チェコに続いて、3度目の失敗だったように見えるけれども、「現存社会主義」の体制の内部において、新しい実験が行われたことの歴史的意義が消えるはずはない。」(377)

こうして、多様な「社会主義」が紹介される。

「例えばユーゴスラビアは、ソ連主導のプロレタリア国際主義から離れて、早くから自主管理型社会主義の道を歩んできた。...ユーゴの社会主義は、地方分権型であり、企業や労働者の自主管理が基礎になっている。」(378-9)

「ハンガリーなどでは、その後の経験を踏まえて、分権化や市場メカニズムの利用等が積極的に導入されている。」(379)

「ポーランド「連帯」の実験もまた、そうした動きに繋がった点を見逃してはなるまい。すでに東欧諸国でも、社会主義へ向けて多様な道が選択されつつある。」(379)

「中国の社会主義は、これまた第二次世界大戦と結びついたこと、さらに植民地からの解放と共に社会主義化が進められたことで、ソ連モデルとの違いは大きい。...最近では市場メカニズムの大胆な導入採用、企業の自主性の尊重など... (の) 方向がとられている。」(380)

「朝鮮民主主義人民共和国の場合は、プロレタリア独裁と言っても、ソ連型とは若干異なり、朝鮮労働党の組織が工場での管理組織として機能している。この点では、労働者組織が党組織と一体化して、国家権力を形成しているわけで、ある種の労働者国家かもしれない。」(380)

「このほか、キューバの社会主義、ベトナムやアフリカの一部の社会主義など、植民地解放に基づく第三世界の社会主義は、近代社会の市民社会の歴史の発展段階を飛び越しながら、それぞれ独自の社会主義のタイプが形成されているのである。」(380)

モデルなき社会主義の時代

こうして、今日ではモデルなき社会主義の時代に至っているが、ここでマルクス＝レーニン主義の問題点がまとめられている。

「しかし、すでに「現存社会主義」にも「五つの共産主義」の現実があり、モデルは多様化している。というよりモデルなき時代に、マルクス＝レーニン主義を官許イデオロギーとするソ連モデルから学ぶものは、ごく限られたものにすぎなくなっている。」(381)

「第一に、マルクス＝レーニン主義においては、資本主義体制の**一挙崩壊型の革命主義が...**。しかし、...今日、そうした**一挙崩壊型の革命主義による社会主義の道は現実性をもちえない。**」(381-2)

「第二に社会主義のソ連モデルでは、前衛党による武装暴力革命を前提にして、プロレタリアの前

⁴ ここで「五つの共産主義」は、G.マルチネ（熊田亨、訳）『五つの共産主義〈上下〉』（1972）を想起させるが、具体的な言及はない。なお、本書での「五つの共産主義」とは、ソ連、ユーゴ、チェコ、キューバ、中国を指す。ここでは、それらを踏まえて、「多様な共産主義」という意味で用いられているようだ。

衛が権力を奪取してプロレタリア独裁を実行し、…。(しかし)逆に、市民的自由や議会制民主主義を認め、自由や民主主義を徹底させながら社会主義の道を進めようとすれば、プロレタリア独裁の否定に向かわざるを得ない現実がある…。」(383・4)

「さらに第三に、中央集権的指令型社会主義は、すでに高度工業化を達成し、生活水準の向上が実現されている先進国経済においては、社会主義システムとしての魅力に乏しい。ソ連タイプにおいては…計画経済が実現されることになったが、…経済の不効率性や生産性の停滞などの限界を暴露しているのである。」(284)

⇒このように、マルクス＝レーニン主義型の社会主義の問題点が、①一挙崩壊型の革命がムリであること(革命運動の視点)、②自由や民主主義を徹底を前提とすれば、プロレタリア独裁は否定されるべきこと(政治の視点)、③いわゆる計画経済は、経済の不効率性や停滞を招いていること(経済の視点)、として整理されている。

ソ連社会主義の危機

「すでに第2部での考察でも明らかと思うが、『資本論』をはじめ、マルクスの思想と科学が、それ自身でマルクス＝レーニン主義のイデオロギーとは言えない。」(385)

「にもかかわらず今日、体制の組織統合のイデオロギーとして、マルクス＝レーニン主義の君臨する「現代社会主義」に、マルクスの思想と科学の相対化による批判の可能性を見ることはできない。…むしろ、このような批判的研究の制約が、ソ連型社会主義を含めて、「現存社会主義」の危機の背景をなしている点に眼を向けるべきであろう。」(286・7)

抑圧される科学的研究の自由

「いうまでもなく、今日、ソ連型社会主義のダーティー・イメージの象徴になっているのは、官許国定の思想としてのマルクスレーニン主義によるイデオロギー統合のために、市民生活上の自由や民主主義が著しく制約ないし圧殺されている点にある。」(387)

「この歴史的事実からしても、「現代社会主義」において、官許国定の思想であるマルクス＝レーニン主義の支配から、科学的研究の自由を独立させ保障することが必要である。」(388)

ソ連・マルクス＝レーニン主義研究所の功罪

「マルクス＝レーニン主義研究所がソ連共産党中央委員会の直属の機関であることによって、一般の科学アカデミーにおける科学的研究と比べて、一党独裁の官許国定のイデオロギーの性格が強められ、科学的研究が客観的に独立できなくなっている点こそ重大である。」(389-90)

「それだけに、『資本論』などの科学的かつ批判的検討が必要であり、理論的難点や欠陥を修正しなければならないし、その修正に基づく現状の科学検討が必要なのである。」(391)

⇒旧ソ連においては、不思議なことに(当然のことに)、マルクス経済学の研究は存在しない、それ自体が「危機」の背景にあるという指摘は的を射ていよう。

「現存社会主義」は「仮説」のコピー

「経済運営面では、(1)土地を含む生産手段の国有化に基づく重要産業の国営化、(2)党の官僚組織による集権的計画経済、(3)生産の社会化に基づく重工業優先の生産力の発展、などの特徴を上げることができた。」(392)

「(しかしこれは)『資本論』以前の、単にイデオロギー的仮説に過ぎなかった唯物史観からの社会主義にとどまっているように思われてならない。」(393)

「こうした唯物史観に基づく社会主義の発想では、...土地を含む生産手段の私有制の廃止、つまり国有化と国営化がもたらす社会主義の基本に据えられることになる。この視点を、社会主義の「**所有論的アプローチ**」と呼ぶことにしよう。」(394)

「要するに、(1)所有論的アプローチ、(2)暴力革命論、(3)生産力主義など、いずれも初期マルクスの唯物史観のイデオロギー的仮説から導かれた命題であるが、この仮説のコピーこそ社会主義のソ連モデルになったことは疑いをいれまい。」(394)

⇒土地を含む生産手段の国有化(所有論的アプローチ)は、初期マルクスの唯物史観からの「コピー」だとされる。より具体的には、以下のよう。

国有・公営化は経済の不効率を招く

「社会主義にとって、この枠組みの変革が必要であるが、私有財産を国有化へ、私的資本の競争を集権的計画化へ、それらとともに労働力商品化の止揚による労働者の解放が実現すると見る唯物史観の発想を、全て全面的に否定する必要はない。しかし同時に忘れてならないのは、近代社会の資本主義経済にとって、私有財産制は、生産関係の法的な枠組みであり、単なる外枠にすぎないということである。／同様に労働力の商品化にしても、それによって資本主義経済に基本矛盾が持ち込まれる事になるが、労働力商品化だけでは賃労働の前提を説明するだけで、それ以上のものではない。」(395)

⇒やや分かりにくい。続けて以下の文言が示される。

「初期マルクスの、「私有財産－疎外された労働」の指摘は、資本主義経済の体制の外枠の説明にすぎないのであり、その枠組みの内部で機能する経済活動の内容(は)、...(初期では)全然おこなわれていなかったのである。」(395)

「マルクスは、1860年代から70年代にかけて『資本論』を書き、資本主義経済の形態や機能運動を具体的に解明した。それらをトータルに前提とした上で、社会主義がどのように機能論的に構想できるのか、マルクスは断片的な示唆を別にして、「**機能論的アプローチ**」の内容を十分に展開しなかった。」(396)

「以上のように考えれば、「機能論的アプローチ」を欠いたソ連モデル、さらに「現存社会主義」の欠陥は明らかだろう。」(397)

⇒マルクスも「機能論的アプローチ」に関しては「示唆」にとどまるが、「ソ連モデル」の理論的な欠陥は、それを明確にしない点にあるということか？ 先の点も含めて、議論すべき問題であろう。

第2章 日本型マルクス主義とは

日本の開国を知っていたマルクス

「驚くことに、すでにマルクスは、幕末をむかえた日本の開国の情報を入手していたのである。彼の知見は、さすがにグローバルである。しかし、それでも中国の植民地化と日本の近代化の発展の差異には触れていない。また、世界市場のヨーロッパの「小さな隅」における社会主義革命の必然性と世界市場におけるブルジョア的発展の相関図についても、はっきりした解答が準備されていないこともわかる。世界市場の発展と世界恐慌、それが世界革命につながるという恐慌・革命ドグマが、この時点ではまだマルクスの頭の中でイデオロギー的仮説に過ぎない形で占拠し続けていたのである。」(400)

情報源はオールコックの『大君の都』

「では、マルクスの情報源はどこにあったか。不破哲三氏の研究「マルクスと日本」によれば、マルクスが第3巻の草稿を準備していた1863年から65年頃、特に地代論に関連して、彼はラザフォード・オールコックの『大君の都—幕末の日本滞在記』を読んだらしい。これが種本になって、『資本論』の中に日本研究に関係した部分が入ったという興味深い推測が試みられている。⁵⁾」(404)

「すでに『資本論』では、純粋資本主義を抽象して、自立的な経済的運動法則の解明に成功したマルクスは、一方でイギリス経済の現実にも、非資本主義的な残滓の存在を認めながら、それとの対比において、他方ではアジアの日本における前近代的な「土地所有の純封建的な組織」や「現物地代」の残存の事実を指摘したものと思われる。ここでは、すでに紹介した50年代のエンゲルスあての手紙のように、世界市場の地球的規模での拡大により、日本もまた開国を迫られながら、イギリス経済に連続した形で、ブルジョア的発展が進む事実を強調してはいない。むしろ逆に、日本における前近代的な「純封建的組織」の方が重視されている点が特に興味を引く。純粋資本主義の『資本論』の世界が、マルクスの日本観に微妙な変化を及ぼしたのである。」(404-5)

⇒上の傍線部分は、重要だと思われるが...、よく理解できない。

労働派と講座派の対立

「しかし『資本論』などの本格的導入は、大正デモクラシーの下で、ロシア革命の成功と結びついて行われた。この事情は、(1)イギリスに対する後進性という点で、日本がロシア資本主義と同じような地位にあること、(2)ロシア革命の成功により、マルクス主義の理想が実現されたというインパクトが強かったことなど、いずれにしてもマルクス主義の日本への導入は、マルクスに対してレーニンをもっぱら正統的継承者とする、マルクス＝レーニン主義として進めることになった。」(405)

「(そこで)純粋資本主義の『資本論』の世界の理論的意義について、正当な評価を受けることなく、歴史主義と革命主義のイデオロギー的な歪みを免れなかった。」(406)

⇒当時は、労農派と講座派として論争がなされたが、いずれもこうしたバイアスを持っていたということだろう。納得のいく分析である。

被害者意識に支えられた日本のマルクス主義

「日本経済が、ロシアとともに、最後進国として資本主義の道を歩み始めたことは、歴史的に見れば、否定できない事実である。そして、同じように肩を並べていたロシアは、革命によってソ連型の社会主義へと別の道を進んだ。同じ仲間だった後進ロシアが、歴史の発展段階で言えば、もうひとつ先の社会主義へ進んでしまった。これが日本資本主義を後進性という特殊性で見る社会観を増幅強化することになったと言える。ここから二重の後進性イデオロギーが生まれる。」(408-9)

「一方で 欧米先進国に対し後進性のハンディキャップを背負っての欧米崇拜、他方ではソ連型社

⁵ 『資本論』のどの箇所を指すのか明示的ではないが、おそらく以下の部分であろう。『資本論』第7編、第24章、第2節「農村住民からの土地の収奪」の箇所において、「封建領主の権力は、どの君主のそれとも同様に、彼の地代帳の長さではなく彼の家臣の数にもとづいていたし、またこの家臣の数は自営農民の数にかかっていた。」という本文の文言があり、その「注」として次のように記されている。すなわち、「日本は、その土地所有の純封建的な組織とその発達した小農経営とをもって、たいていはブルジョアの偏見にとらわれているわれわれのすべての歴史書よりもはるかに忠実なヨーロッパ中世の姿を示している。中世の犠牲において『自由主義的』であるということは、あまりにも都合のよすぎることである。」(『資本論』第1巻、大月書店、937-8)。やや解りにくい、要するに、当時のヨーロッパより日本の方が、純粋な形で封建的な土地所有や生産体制が維持されている、という例として示されたといえる。

会主義を理想化するマルクスレーニン主義のイデオロギーの共存、これが日本型マルクス主義の著しい後進性イデオロギーの特徴だったと言えないだろうか。」(409)

⇒こうした日本のマルクス主義における、「二重の後進性イデオロギー」の存在という認識は、鋭いものであり、押さえておくべき視点であろう。

「しかし 翻って考えなければならないのは、日本型マルクス主義を支えた後進性イデオロギーが、実は戦後の高度成長の中で、モウレツ社員型の働き中毒と企業一家的な会社主義など、体制 統合のイデオロギーとしても機能した事実だろう。」(409)

「そして戦後日本の高度経済成長は、こうした後進性イデオロギーによって、官民労一体の日本株式会社を組織統合するのに成功したのである。」(410)

⇒先の認識の延長線上にある指摘だが、この日本型マルクス主義といわゆる「日本株式会社」の関係も押さえておくべき視点であろう。

なぜ今、マルクス離れなのか

「今日、すでに日本経済は、経済大国としての地歩を築き上げて、世界の GNP の 1 割を占めるに至った⁶。重化学工業化率も 先進国などトップを進んでいる。高度工業化の点でも、もはや 後進性を特殊性として見ることはできない。...すでに後進性イデオロギーの終焉を迎えたかに見える。」(411)

「以上のような後進性イデオロギーに終焉を迫られた状況の中で、日本型マルクス主義も完全に風化し、思想的ヘゲモニーを喪失してしまった点が重大である。...学生をはじめ大衆の「マルクス離れ」は決定的となっている。」(411)

⇒日本のマルクス主義はいわば後進性イデオロギーと表裏の関係にあり、後進性が消滅すれば、当然にも「マルクス離れ」が生じるという認識であろう。

「現存社会主義」は夢でも理想でもない

「このような背景から、60 年代安保世代はスターリン主義の旧左翼を批判しつつ新左翼という名のマルクス＝レーニン主義の硬直した変種を登場させた。...70 年代のはじめまで、...それなりの期待をつなぐものがあった。」(415)

①「しかし、60 年代から 70 年代へ、平和共存からデタント、そして東西交流が急速に高まり、鉄のカーテンは静かに開かれ、マルクス＝レーニン主義を官許国定の体制統合の思想とする「現存社会主義」の現実を目の当たりにすることになった。...社会主義の神話が崩れてしまったのである。」(415)

②「それだけではなかった。...日本型社会主義が後進ロシア型であり、それゆえのマルクス＝レーニン主義だったために、もう一つの社会主義による救いもなかったのである。」(416)

③「第三に、西欧社会主義はすでに述べたとおりマルクスの思想や学説を重要な源泉としながら、後進ロシア型のマルクス＝レーニン主義の一神教的なものではなく、多元的な性格を持っていた。...やはり社会主義のもう一つの道だったのである。」(416)

⁶ 日本の世界に占める GNP(GDP)シェアは、1995 年頃の約 18%をピークとして、その後は減少し続け、2025 年では約 3～4%になっている。

⇒戦後、①マルクス＝レーニン主義の実態が明になったこと、②日本の社会主義は対応できなかったこと、③そこで、やはり西欧社会主義は多元的な性格を持つ「もう一つの道」だったことが確認されている。

日本にとってのマルクス主義とは何か

「日本型マルクス主義が、マルクス＝レーニン主義として、西欧型社会主義とは異質なものであればあるほど、ますます建前のエネルギーと現実との乖離が大きくなる。...日本型マルクス主義の風化現象とヘゲモニー喪失は、以上のような理由によって 80 年代向けて急速に露呈してきたと思う。」

(418)

⇒先の認識をふまえた、日本型マルクス主義にたいする現状認識と言える。

終章 百年後へのテーゼ

21 世紀に向けて

「マルクス死後百年は、社会主義に対して科学的基礎を提供したはずの『資本論』をも根底的に洗い直し、『資本論』と「現存社会主義」について再検討を進めることを強く要請しているのである。19 世から 20 世紀へ、世界最大の思想となったマルク主義が、21 世紀へ向けて、いま避けることのできない試練を受けている。」(421)

今、マルクス主義に問われているもの

「過渡期としての現代は、東側が中央集権的指令型社会主義だとすれば、すでに西側も分権型民主的社会主義とでも呼ぶことのできるような性格を持っている。西側の社会主義を、「ニセのまやかしのヌエ的性格の社会主義」として異端視できる時代ではない。」(422)

「ケインズ主義の有効需要拡張政策に基づく、混合経済体制と福祉国家の発展も、日本では「国家独占主義」とか「現代帝国主義」と呼ばれてきた。その呼び方はともかく、単純に公式主義的にそれを資本主義経済の体制的枠組みに還元する見方は誤りであろう。ある場合には、かなり長期にわたって労働者の利益を代表する階級政党が政権を担当し、労働組合などが組織的に参加・介入し、広く同権化する体制が確立しつつ福祉国家の体制が形成されてきた。これが社会主義ないし社会民主主義として公認され、西欧社会では社会主義として正統性を与えられてきた事実を忘れてはなるまい。」(423-4)

社会主義の再生のために

「現代の社会主義が当面する多元的かつグローバルな危機意識を持ち、マルクスの思想と『資本論』の科学の有効性を改めて問うとすれば、今日の時点で必要なことは、社会の進歩と人間の解放という、社会主義の原点に立ち戻ることだと思う。」(425-6)

「そして、階級の解放、民族の解放といった、従来の狭い枠組みを大胆に打破して、人間解放としての社会主義の初心を蘇らせることが必要なのである。」(426)

⇒これが、本書の最後のメッセージである。

本第 3 部では、社会主義論が正面から、しかも多様に論じられている。かなりの高密度なので要約で抜け落ちた点もあるが、議論の資料となれば...、と思う。